オバマの挑戦

―人種を超えた共同と連帯を目指して―

大塚　秀之（北海学園大学教授）

一

朝日新聞の真鍋記者は、米大統領選直後の一一月七日の同紙「風」欄において、オバマ氏の第四四代大統領就任で「米国の歴史が二つに分けられることになるのは間違いないと思う」と論じ、その二つとは「オバマ前と、オバマ後に」であると語っている。

はじめてこの文章を読んだとき、私は何と大仰なと思ったものだが、よくよく考えてみると、成る程そうかもしれないと思うようになってきた。

政治や経済ももちろん重要だが、米国社会をさしあたりより深く規定しているのは人種的分裂ではないかと常々考えてきた私にとって、オバマ氏の登場と大統領就任は、キング牧師の登場と公民権運動の時代の訪れ以上に大きな意味を持つことになるかもしれない、と感じられたからである。

米国社会は、オバマ氏の登場を契機として、この国の最大の傷である人種的分裂の修復に本気で取り組むであろうし、長年にわたって対立してきた黒人社会と白人社会の和解も大いに進展することになりはしないか、と。

二

黒人問題を研究テーマの柱の一つとしてきた私は、当然のことながら、バラク・フセイン・オバマという耳慣れぬ名前の、四〇歳代半ばの黒人政治家が、二〇〇四年の民主党大会の基調演説を行って一躍全国的な脚光を浴びることになったり、二〇〇六年秋には大統領選への出馬を正式に表明したことを承知していた。

彼がずば抜けた頭脳の持ち主で、秀才中の秀才にしか回ってこない「ハーバード・ロー・レビュー」誌の編集長に黒人として始めて選ばれたことや、その誠実な人柄や能力の評価が、直接彼を知る人々の間できわめて高いこともよく知っていた。

しかし、イラク戦争反対の旗を高く掲げたオバマ氏が、下馬評の高かったクリントン候補にせり勝って民主党の大統領候補に選ばれるとか、黒人というとてつもなく重いハンディキャップを抱えた彼が、白人候補に圧勝して大統領に選ばれるなどとは夢にも思っていなかったから、選挙戦が始まってからでさえ、オバマ氏への私の関心は薄かった。そうした私が、にわかにオバマ氏に強い関心を抱き、もっとオバマ氏のことを知る必要があると考えるようになったきっかけは、選挙戦のさ中の三月一八日にオバマ氏がフィラデルフィアで行った、人種をめぐる演説であった。この演説を読んだ私は、これが、たんにオバマ氏を理解するうえでばかりでなく、選挙結果を左右するほど重要だと直感したのである。

オバマ氏とその選対チームは、人種の融和というものを米国社会再生のもっとも重要な鍵と認識していたが、戦術的な配慮から、この国の根深い人種差別とその歴史を真正面から論じることを避けようとしてきた。しかし、詳しい事情は省略するが、重要な選挙戦の山場で、どうしても米国の人種差別と、それに対するオバマ氏の見解を表明しないわけにはいかなくなった時に、それに応えようとしたのがこの演説であった。

オバマ氏はこの演説において、奴隷制度とその後の人種差別が、今日においてもどれほど黒人の生活を破壊し、苦しめているかを切々と訴え、黒人のあいだには強い憤りの気持ちが存在している事実とその背景を、白人アメリカ人がしっかりと理解する必要があることを説くと同時に、黒人アメリカ人に向かっては、白人アメリカ人の側にも黒人の場合と同じように強い憤りが存在している事実を理解する必要があると、力説したのであった。

この演説はあまり紹介されていないようなので、以下では、オバマ氏が語る白人アメリカ人のおかれた状況の部分のみを、少し長くなるが紹介してみようと思う。

三

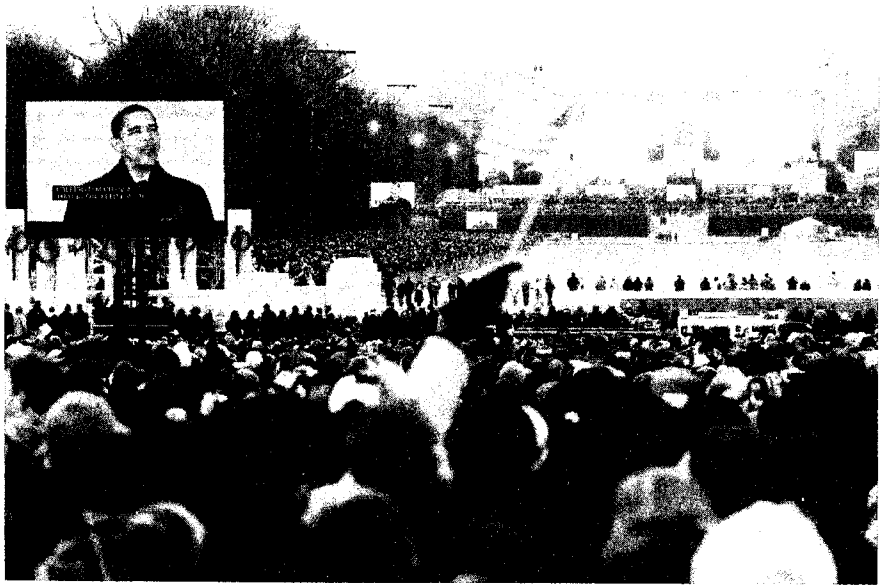
「黒人の場合に見られるのと同様の怒りが、白人社会の多くのところに存在しています。労働者階級やミドルクラスの白人アメリカ人のほとんどは、自分たちが白人であるということによって、何らかの有利な立場にあるとは考えていません。彼らの経験は移民出身者としての経験なのであって、自分たちは誰からも恩恵を受けてきたわけではなく、自らの努力だけで今日の地位を築いてきた、と考えているのです。彼らは一生懸命働いてきたのに、その仕事が海外に移されたり、生涯働きつづけてきたあげくに年金が無価値になるのを経験してきました。

彼らは将来に不安を覚え、その夢が消え去るのを感じとり、一向に上がらない賃金と地球上での競争の時代には、人の成功は別の人の犠牲の上にしか成り立たないというゼロサムゲームが、今日の社会というものの姿なのだと考えているのです。

そういう訳ですから、自分の子どもたちを町の反対にある学校にバス通学させるよう命じられたり、自分たちが犯した訳ではない不正義の故に、アフリカ系アメリカ人が仕事や大学入学面で有利な条件を与えられるということを耳にしたり、地元で発生する犯罪への恐怖心には偏見がかかわっていると言われたりすると、次第に憤りが高まってくるのです。黒人社会内部の怒りの場合もそうですが、白人のあいだのこうした怒りも、あらたまった場では発せられるということはありません。しかし、こうした怒りが、少なくとも一世代にわたって独特の政治的雰囲気をつくりあげてきたのです。福祉や差別是正政策をめぐる白人の怒りが、レーガン連合の結成を促進してきたのです。政治家はいつも、自分たちの利益のために犯罪への恐怖心を利用してきました。……

黒人の怒りが、しばしば非生産的な方向に向けられてしまったように、白人の側の怒りも、ミドルクラスを苦しめる本当の敵から注意をそらしてしまいました。ひんぱんにインサイダー取引を行う企業文化、怪しげな会計操作、手っとりばやい利益への欲求、ロビーイストや特殊利益集団に支配されている連邦政府、多数を犠牲にして少数者の利益をはかる経済政策、これらこそ、ミドルクラスの人々を苦しめている真の原因なのです。白人アメリカ人の怒りにはそれなりの根拠があるのだということを認識しないで、それが消え去るのをただ願ったり、白人アメリカ人を心得違いとか、いわゆる人種差別主義者と決めつけるだけでは、人種的溝を広げるだけで相互理解への道を閉ざすことになるのです。」

オバマ氏は、黒人に向かってはこのように呼びかけ、



リンカーン記念堂(右)で行われた就任祝賀イベントで、オバマ次期米大統領のスピーチに聞き入る大観衆。（写真提供：共同通信社）

対立し合い、怒りをぶつけ合う白人と黒人が、それぞれ相手の置かれている状況をしっかり理解し合い、共同して生活の向上と政治の変革に向けて努力しようではないか、と呼びかけるのである。

四

就任後最低の水準で低迷する支持率が示すブッシュ政権への強い不満と、折から急激に進行する経済危機の下で、オバマ氏の訴えは白人有権者に確実に届いていった。大統領選における五三パーセントというオバマ氏の得票率は、一見たいしたことはないように見えるかもしれないが、戦後史の中ではケネディーやクリントンをも上回り、オバマ氏を凌駕する民主党候補は六四年のジョンソン大統領一人のみといえば、その意味が理解していただけるであろう。

全国的な動向をみると、オバマ氏は二〇〇四年の大統領選挙で民主党のケリー候補がブッシュ候補に勝利した二〇州のすべてで得票率を二ケタも伸ばして勝利したうえ、米国製造業の拠点であるオハイオ州やインディアナ州、南部のフロリダ州やバージニア州といった、長年共和党の牙城の九州でも勝利し、さらにマケイン候補が勝利した二一州中の一六州でも、二〇〇四年より得票を増

加率は大幅であった。

得票の分布をもう少し細かく、郡別にみても、共和党への投票が二〇〇四年よりも増加したのは、米国の貧困地帯として知られるアパラチア山脈沿いから、南部のブーカンとソーベルイジアナ州などの一部に限定され、雪崩のような大変化が有権者のあいだに生じたことが示されている。オバマ候補の声がなお届かなかったのは、農村的色彩の濃い地方に住む、豊かとはいえない白人住民層であった。出口調査によれば、白人男性の五七パーセント、白人女性の五三パーセントがマケイン候補に票を投じたとのことであるが、ここにもオバマ氏の大いなる善戦の跡が如実に示されている。

五

こうした有権者の動向をじつに見事に示してくれるのが、この国の郊外、それも典型的な白人の郊外として知られるペンシルバニア州のレビットタウンに密着して、住民の政治意識の変化を取材した報告である。筆者のマイケル・ソコロブ氏は、両親が引っ越してきた翌年の一九五六年に生まれてから、高校を卒業するまでをここレビットタウンで過ごした、いわば半ば地元住民である。

ソコロブ氏が取材をはじめた二〇〇八年三月当時のレビットタウンでは、オバマ候補はおよそ問題にならなかった。人口五万四千人のこの町（といっても三都市その他からなる集合体であるが）の住民の九〇パーセント以上が白人で、階層からいえばブルーカラーの労働者、オバマ氏の演説にも出てきたいわゆるレーガン・デモクラットが中心である。しかし、周辺の鉄鋼業その他の製造業では年々工場閉鎖が進行し、住民のあいだには生活への不安がうっ積している。五月に行われた民主党の予備選挙では、四分の三までがクリントン候補に票を投じたうえ、本番の大統領選ではマケインに投票しようかと考えている白人男性も多かった。

しかし、わずか半年と少しの間に、巨大な変化が生じることになった。「りんごの木」と呼ばれる地元の投票所では、一〇〇〇を少し上回る投票総数の中から、オバマ氏に六八二票が、マケイン氏に三八八票が投じられたが、ソコロブ氏の取材に応じ、オバマ候補を支持したと答えた六〇人以上の住民の中で、予備選挙でオバマ氏に投票した人は皆無であった。オバマ氏支持に踏み切った最大の理由は、なんといっても変化する経済状況であった。イラク戦争も多くの人が理由にあげ、それを景気の悪化と結びつけて考えていたそうで、ソコロブ氏は、「オバマ氏の人種は、たしかに、人々の候補者選びの要因であったが、人々は、人種をその他の要因とくらべて比較検討することを迫られたのである」と結論づけている。

六

さて私は、今回の大統領選挙をめぐる私のある評論の最後を、以下のように締めくくった。

「今回の選挙の過程で生まれた変革への意識と、萌芽的な人種を超えた共同とがさらに強化されるならば、米国は大胆に進歩への道を歩むことになるのかもしれない。奴隷制度を廃止した南北戦争や、大恐慌を克服しようとしたニューディールの時代のように」と。

いまだにはっきりしないアフガン問題の今後、最近日米間で取り交わされた日米軍事同盟堅持の方針などにも示されているように、船出をしたばかりのオバマ政権には、大いなる不安材料がたしかに存在している。他方、二月末に発表された施政方針や予算教書には、ちょうどニューディールの時代がそうであったように、まさに危機の時代でなければ到底打ち出されないであろうような、大胆でラディカルな政策が盛り込まれ、オバマ政権が本気で米国社会の変革に取り組もうとする決意が示されている。当然のことながら、誤りは誤りとしてその是正を強く要求すると同時に、オバマ氏が示した米国社会の再生と平和な世界の建設については、その方向を大いに励ましていこうではないか。

〔補〕人種に関するオバマ氏の演説全文は、「ニューヨーク・タイムズ」紙の電子版三月一八日付、ソコロブ氏の二つの報道は、「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」誌四月六日号と一一月九日の「ニューヨーク・タイムズ」紙に掲載されている。同じ「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」誌一〇月一九日号に掲載された「労働者階級の票を求めて」という、同誌マット・ベイ記者の長文の評論と合わせて読むと、オバマ氏と白人労働者とのあいだの関係が、さらによく理解できるであろう。

なお、白人優越主義の弊害については、私は六の冒頭で言及した評論の中で、以下のように論じた。

「白人アメリカ人のあいだには、黒人を劣等視する優越思想がなお色濃く残り、労働者の場合も、白人社会の一員であるとの人種意識が労働者という階級的自覚をしばしば圧倒してきた。白人であるということがどれほど有利に作用してきたかに無自覚であると、差別是正のための政策が白人に対する逆差別として受け取られ、黒人への反発や敵意さえ生じることになった。住環境の悪化や失業の増加の原因は、もっぱら黒人をはじめ近年増加する不法移民などに向けられ、本当の原因であるこの国の仕組みや政策の批判に及ぶことは乏しかった。

白人優越思想はこうして、働く国民のあいだの団結や協力を妨げるばかりでなく、そのことによって米国の社会進歩の大きな障害をなしてきたのである。」（『しんぶん赤旗』二〇〇八年一一月二五日）